

接概念学習の学習曲線の因子分析を、概念学習の方略との関連で、試みた。多少 positive な結果も得られているので、データの補足を行ない、明年の紀要に発表す

る計画である。なお、“計量分析談話会”等を通じて、当地において、この領域に関心を持つ人々と親しくなれたことは幸いであった。

一 年 の 歩 み 薩 山 英 順

この一年は昨年度と同様に、臨床心理相談室における心理治療の実践を中心に、またそうした実践活動を通しての研究活動を継続してきた。

こうした活動の内容としては、自閉児の心理治療、治療教育を中心に、相談室においては自閉児の個別遊戯療法および集団遊戯療法を実践し、自閉児の治療教育においては学校教育の現場に出かけ、自閉児を持つ担任と具体的治療教育の方法について検討を重ねてきた。

これらの活動の「まとめ」として、本年度の紀要に丸井文男らとの協同研究として「自閉児の集団適応に関する研究—その(2)—、—その(3)—」をまとめた。前者においては、自閉児の普通学級における低学年段階の適応状況の変容とそれを規定する要因について検討し、後者においては、特に所属する学級の特質は問題にせず、症児側の知的ポテンシャルと高学年段階における学校適応上の問題について検討した。

また、自閉児の基本的な発達過程の把握の問題について、就学前までの過程の検討を行い、自閉児の言語発達過程による5類型のうち、最も発達速度の遅く、予後に関して悲観的と考えられている言語の消失期を持つ群

(L1型)の対人関係発達の様相から、L1型の中でも就学時までに良好な発達を示すタイプとやはり不良な発達しか示さないタイプのある事を見出し、日本教育心理学会第17回大会に発表した。

さらに、本年度においては大学院生、学部研究生の諸君と「遊戯治療における治療的意味の検討」を具体的症例を通して行ってきており、自閉児および情緒障害児の遊戯治療を中心に、そうした問題をまとめつつある。また、こうした方法によるスーパーバイズ・システムとしての有効性を感じており、今後、その意味においても検討していく予定である。

研 究 の 課 題 と 経 過 梶 田 正 巳

昨年4月1日付をもって、教育心理学教室へ着任した。この一か年は、新しい教室で研究を始めるための準備とこれまでの研究の成果に区切りをつけ、新たな出発点とする仕事に忙殺された。

1. 弁別学習の研究は、一昨年学位論文をもって、一つの折目をつけることができた。この論文には、未公刊の実験も含まれており、愛知教育大学中野靖彦氏と共に、日本教育心理学会第17回大会(昭和50年9月、宮城教育大学)において2編を口頭発表した。また、これに関連するその後の実験的研究については、本紀要の資料として執筆した。

2. 上記の研究との関わりで、新たな研究の方向付けを現在模索しようと試みている。これは、分類学習、弁別学習における「分類されたもの」、「弁別されたもの」の相互関連性について、Piagetのいわゆるgrowth of logic をヒントにして分析する仕事である。そのために、50年度の研究費で「反応時間自動記録装置」を設置して

いただいた。このおかげで、実験者は、被験者の反応記録をとることから解放され、学習過程を観察する余裕が生まれるようになった。なお、この装置を利用して分類学習の実験を始めているが、従来の学習過程の解析資料に、有意味な成果をつけ加えることができればと期待している。この実験との関係で、3歳児より6歳児にかけて、線画による「具体物」を刺激として、命名反応の分布を調査した。この調査資料を手掛りとして、学習、記憶の研究ではきわめて必要度の高い「norm」の明らかな標準的刺激の作成を試みてみたい。この方向における研究には、若干の基本的問題を検討する必要がある、日時を要する。

3. 昨年11月春日井市立東部中学校において、第10回全国バズ学習研究集会が開催された。この集會に、塩田教授とともに助言者として参加したのであるが、改めて教育実践に直接示唆しうる教育心理学的研究の少ないことを痛感した。微力ながら、教育実践に役立つ教育心理